

丹後震災記念館について

資料4



■丹後震災記念館

構造：鉄筋コンクリート造2階建て

階数：地上2階 地下1階建、塔屋付

設計：一井九平（京都府技師）

施工：山虎組

竣工：昭和4年（1929）12月18日竣工

平成17年3月18日 京都府指定文化財に指定

<北丹後地震の概要>

発生：昭和2年3月7日

被害：死者2,925人、負傷者7,806人、全壊12,584棟
（97%の家屋が焼失した町もあり）

【沿革】

震災1周年における大海原重義京都府知事の談話において、全国から寄せられた震災義援金残金の使途として震災記念施設の建設の構想が語られ、震災2周年に際して京都府学務部長より財団法人の設立、震災記念館の建設、全（同）記念物の保存、慰霊祭の施行、地震に関する研究調査、社会教化施設の設置が建議された。

※建議された内容のうち、地震に関する研究調査は実現せず、記念物の収集保存もそれほどの成果を上げられなかったようである。

これを受け、昭和4年3月に震災記念塔が建立され、12月に丹後震災記念館が竣工した。

震災3周年からは、京都府が設立した財団法人が主体となり、丹後震災記念館にて慰霊祭が催行され、震災10周年の昭和12年まで毎年続いた。その後、昭和18年（1943）と昭和23年に慰霊祭が行われた。

昭和28年（1953）の財団法人解散後、丹後震災記念館は峰山町に無償譲渡され、昭和30年（1955）から峰山町中央公民館と峰山町立図書館として利用され、昭和55年（1980）からは峰山町錬成道場として平成23年まで利用された。

【関連事業】

財団法人が実施した事業として、丹後震災殉難者名簿の作成・写真の収集、震災画の作成がある。殉難者名簿は『昭和二年丹後震災殉難者名簿』として作成された。

被災死亡者の写真収集はどこまで行われたか不明であるが、『死者のおもかげ』というアルバムが峰山図書館に保管されている。

また、震災画は昭和9年（1934）の慰霊祭後の理事会にて、写真収集とは別に震災直後における罹災状況を絵として記念館に掲出する希望が報告され、これを受けて昭和10年（1935）に関西美術院の院長であった伊藤快彦（いとうやすひこ）に制作を依頼、昭和11年（1936）には完成し、丹後震災記念館に掲出された。昭和12年（1937）の震災10周年慰霊祭の記録写真には、伊藤の実況画とともに、翌年に描かれた京都市立美術工芸学校の生徒が描いたとみられる絵画が確認できる。



完成当時の丹後震災記念館と震災記念塔



昭和12年 震災10周年慰霊祭の様子

【建物の特徴と一井九平について】

震災記念館は、当時では珍しい鉄筋コンクリート造を採用し、窓の開口を極力小さくするなど耐震性能を意識した建築物である。

また、近代建築物としての価値は、昭和58年（1983）に日本建築学会により「日本近代建築総覧」に収録されていることから明らかであるといえる。

設計に携わった一井九平は、私立工手学校（現在の工学院大学）造家学科の第1期生で、設立にも関わった片山東熊が同課の主理であったことから、ジョサイア・コンドルに始まる日本近代建築の薫陶を大いに受けていたとも考えられる。

一井は工手学校卒業後、東京府土木課に所属、その後、岡山・福岡などで公共事業に携わり、明治34年（1901）から京都府に所属、松室重光の下で京都府庁旧本館の設計などに携わり、キャリア晩年である昭和2年8月～昭和4年3月まで峰山に赴任、丹後震災記念館・峰山小学校などの設計に携わった。

【全国的な位置付け】

丹後震災記念館以外の近代（戦前）における震災記念施設としての建築物は、濃尾地震（明治24年）に対する岐阜震災記念堂、関東大震災（大正12年）に対する震災記念堂・復興記念館、横浜市震災記念館、横須賀市震災記念閣、昭和三陸地震（昭和8年）に対する宮城県震嘯・海嘯記念館（県内32か所）が挙げられるが、明治～昭和期の大規模な地震災害の発生件数と比較してみると数が多いとは言えない。

また、宮城県下の32施設は他施設と比べ集会所兼避難所としての性質が強く、これらを除外して考えると建築物としての震災記念施設は非常に少ないといえる。

さらに現存する記念施設は、丹後震災記念館・岐阜震災記念堂、震災記念堂（現在は東京都慰霊堂）・復興記念館のみであり、震災の記憶を後世に伝える施設として貴重な存在となっている。



復興記念館（東京都墨田区）



震災記念堂（岐阜市）

【まとめ】

丹後震災記念館は、近代において稀有な震災の記憶と教訓を記録する記念建築物であるとともに防災啓発施設である。

また、近年保存の機運が高まっている日本近代建築の正統に位置する建築物として価値も有しており、長く後世に伝える必要があるといえる。